

令和5年度
特選コース

第2回 入学試験問題
(2月3日 午後)

S特チャレンジ

国語 (50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都立大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

一 次の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、統率のとれた集団。
- 2、犯人が交番に出頭する。
- 3、仕事を片手間で終わらせる。
- 4、人材を新しく登用する。
- 5、資産家がこだわって集めた調度品。
- 6、時間のカンネンがない。
- 7、スプーンに熱がデンドウする。
- 8、物語の結末をスイリする。
- 9、悪事がハッカクした。
- 10、作戦の計画をネる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

もつじき中学生になる「わたし」は父親に誘われ、石垣島に旅行に来ている。

何だかよくわからない緊張感と、自転車を漕ぎまくった疲れも手伝って、ホテルに戻ってベッドにごろりと寝転ぶと、ほっとため息が出た。そこでふと思い出し、ポシエットから星砂の小瓶を取り出す。そして、思わず大きな叫び声が出た。

中身はまったくの空だった。ポシエットの中で、いつの間にか栓が取れてしまっていたのだ。

「星砂がっ、星砂がっ」

あまりのショックに半泣きになりながら、パパに空の瓶を見せる。ただ A 困ったような表情を浮かべているパパを見て、無性に腹が立ってきた。こんなことで泣くなんて、小さい子供みたいだと思うのに、どうしようもなく涙がこぼれてきてしまう。

「——ほんとはもっと、竹富島にいたかったのに」なじるように、わたしは言った。

「もっかい、星砂を探しにいきたかったのに。そしたら、瓶の栓が取れることにもすぐ気づいてたのに」

「……今さらそんなこと言っても……」

① パパの言うとおりで、わたしも思う。ワガママな幼稚園児みたいなことを言ってるって、自分でもわかっている。だけど、とまらなかつた。

「全然、全部、うまくいかないじゃん」しゃくり上げながら、わたしはなじるようにパパに言う。「星砂はこぼれちゃったし、すっごく楽しみにしてたのに、星だつて見られなかつたし」

「天気は、仕方ないだろう？」

② 低い声で、パパは言う。わたしはイヤイヤをするように、首を振った。

「ママも一緒だつたら、絶対晴れてた。あの人、超絶晴れ女だつたもん……三人で星、見たかつた。ほんとは、ほんとは、ママと三人で星砂を探したかつた」

パパは深いため息をついた。

「仕方がないだろう？」
③ ママは俺たちを残して、遠くに行っちゃつたんだから……あの人は、神様に選ばれたような人だからね。北極星(註)になつた、働き者で親孝行な弟みたいにさ」

「そんな言い方……」

B 声を上げて泣きかけたとき、パパはいきなり上着を脱いでベッドの上に広げた。それからわたしのポシェットを「貸しなさい」とそつと首から抜き取り、黒い上着のシートの上で丁寧にひっくり返した。

「ほら、ちゃんとある。一粒もなくしてないよ」

上着の上には、わたしのハンカチやティッシュや細かな綿埃やチケットの半券や、アメの包み紙なんか(わたはじり)に混じつて、まばらな星くずみたいな砂粒があつた。

パパはそれを丁寧に拾つて、小さな瓶の中に入れていく。慌ててわたしも一緒に拾う。すべてを瓶に収めると、今度は上着の両ポケットをひっくり返した。

「何かじゃりじゃりすると思つたんだよな」

という言葉どおり、二つのポケットからはけっこうな量の砂粒が出て来た。その中から、わたしとパパは、ほぼ同時に別々の星形の砂を見つけた。それを瓶に詰め終えると、パパは得意気に言った。

「ほら、むしろ増えたぞ」

C、大きな口を開けて笑う。

「……ほんとだ」

わたしも思わず、笑ってしまった。パパはふと真面目な顔になって、言った。

「……今回の旅行はな、観光はほんのついでだったんだよ」

いきなりの言葉に、わたしは首を傾げた。

「ほんとはな、人に会いに来た。今、これから会いに行く」

「え、誰に？」

「おまえのお祖母さん……俺の、母親だ」

「……え？」

たぶんわたしは、Dした顔をしていただろう。

パパのお母さんは、パパがまだ小学生だった頃に、離婚して出て行ってしまったのだと聞いていた。パパの実家関係の人たちは、パパも含めて誰もそのことに触れない。一度だけ、酔っ払ったお祖父ちゃんが「幼い子供を捨てていくなんで、なんて冷たい女だ」と言っていたことを覚えている。

恐る恐るその話をする、「それは違うよ」とパパは、首を振った。

「お祖母ちゃんは、ただ勉強がしたかったんだ。結婚しても、子供が産まれてもね。それを、お祖父ちゃんも、お祖母ちゃんの両親も、許さなかった。それでまあ、色々あって、追い出されるような形になったみたいだな……お祖母ちゃん一人で」

「え、それなら、冷たいと言われるのは可哀想じゃん」

「お祖父ちゃんにしてみれば、お祖母ちゃんさえ我慢していれば、ずっと家族一緒にいられたのってことらしいな。だけど、お祖母ちゃんは諦めなかったんだよ」

パパはそれ以上は語らず、「さ、出かける準備だ」と立ち上がった。

今までのラフな格好から、パパは少しだけきちんとした服装になり、わたしは少しだけ可愛い服を着る。

着替えながら、思った。お祖母ちゃんは勉強することを諦めなかった。ということはつまり、パパのことは諦めてしまったってことじゃない？ お祖父ちゃんの「捨てた」という言葉はひどいけど、全部間違いつてわけじゃないんじゃない？

今回の旅行中、いや、旅行のことを言い出したときから、パパは変にはしゃいだり、逆にユウウツそうにしたりしていた。

パパはいい、どれだけの間、お祖母ちゃんに会っていないんだろう？
パパの緊張が、こつちにまで移ってくるようで、胸がドキドキしていた。

タクシーから降りて、目の前のドアを叩くと、白髪頭のお祖母ちゃんが出て来て、「おや、北斗。久しぶり」と笑った。

パパの名前だ。わたしの名前と併せると、北斗七星になる。わたしの名前はママがつけたと聞いている。そしてパパの名前は、今日の前にいる村崎十和子さん……わたしのお祖母ちゃんが考えたのだそうだ。

④ 二十何年ぶりだかの親子の対面は、全然ドラマチックじゃなかった。

「あなたが噂の七星ちゃん。初めましてー」

両手でわたしの右手を包み込み、「握手握手」と歌うように言う。そのまま手を引き、さあ入って入ってと引つ張り込まれた。

入ってすぐがリビングの造りで、勧められたソファに座って、飲み物を出してもらおう。ゲンキキールという名前の、石垣島の乳酸菌飲料だそう。一口飲んでから、そつと聞く。

「あの、噂のって、誰と噂していたんですか？」

それに答えたのは、パパだった。

「ママとだよ、きつと」そしてお祖母ちゃんに向き直って言う。「彼女が、ここへ来たんですね？」

「ええ。NASAに行く前にね。とても素敵なお母さんね、七星ちゃん」

わたしは黙って、こつくりうなずく。

ママは今アメリカで、日本人女性何番目だかの宇宙飛行士を目指して、訓練の日々を送っている。この間スカイプでママと話して、パパと石垣島に行くから、ママのために星の砂を取ってくるねと言ったら、『それならママはいつか、星の形はしてないけど、本物の星の砂をお土産に持って帰るね』と返された。

ママはいつだって、百パーセント本気だ。⑤ 断言したことは必ず実現してきたし、これからだってそうするだろう。

「——母さん」とパパは言った。「俺は妻を……この子の母親を応援しているよ。遠くで見守ることくらいしか、できないけど。母さんがオヤジにしてもらえなかったことを、俺は自分の妻にしてやりたい。でも、だけどさ、やっぱりオヤジの気持ちもわかってしまうんだよ、俺は」

そう話す⑥ パパは、今まで見たこともないような顔をしていて、なぜだか泣きそうになってしまった。

遠く、高く、羽ばたいていく大切な人を、ただ見送ることしかできないのは、やっぱり辛い。取り残されて、置いていかれたような気持ちになってしまうから。

長いこと経ってから、お祖母ちゃんは言った。

「ごめんね、北斗」

「……なんで謝るんだよ」

「ありがとね、北斗」

「礼を言われるようなこともしてねえって」

泣き笑いみたいな声で、パパは言う。

(加納朋子「南の十字に会いに行く」より)

(注1) 「北極星になった、働きの者で

親孝行な弟」

……石垣島を含む八重山諸島に伝わる民話で、死んだ母親に会いに行こうとした兄弟が滝で命を落としたとき、なまけ者の兄ではなく、母を想って熱心に舟を漕いでいた弟だけを神様が星に変えたというもの。

(注2) 「NASA」

……アメリカ航空宇宙局の略称。

(注3) 「スカイプ」

……Skype社が提供しているインターネット電話サービスのこと。

問一、

A

D

にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|----------|--------|--------|--------|
| ア、A—ぼかんと | B—はつと | C—キラツと | D—ぼうつと |
| イ、A—しゅんと | B—ぐわつと | C—キラツと | D—ぼやんと |
| ウ、A—ふわつと | B—どかんと | C—ニカツと | D—ぼうつと |
| エ、A—ぼうつと | B—わつと | C—ニカツと | D—ぼかんと |

問 二、——線①「だけど、とまらなかつた」とありますが、ここでの「わたし」はどのような様子ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、栓をしつかりと締めていなかったことを悔やみながらも、あまりのショックにその失敗を父親になすりつけている様子。

イ、何もかもがうまくいかないことに我慢の限界をむかえ、おさえきれない激しい感情を父親にぶつけている様子。

ウ、小瓶から星砂が出てしまったのは父親のせいではないと頭では理解しつつも、感情のおもむくままに父親にあたっている様子。

エ、今さら言っても仕方のないことだと気づきつつも、失敗ばかりの旅行の不満をぶつけることで父親に甘えている様子。

問 三、——線②「低い声で、パパは言う」とありますが、ここでの「パパ」の様子を説明する言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、困惑 イ、立腹 ウ、嫌悪^{けんお} エ、軽蔑^{けいべつ}

問 四、——線X・Y「首を振った」とありますが、それぞれの内容を説明したものととして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、Xは「わたし」はパパの言葉を無視するかのように「首を振った」が、Yではパパは「わたし」の話を強く否定する気持ちで「首を振っ」ている。

イ、Xは「わたし」はパパの言葉が耳に入らない様子で「首を振っ」ており、Yではパパは「わたし」の話の内容は聞きたくないといった様子で「首を振っ」ている。

ウ、Xは「わたし」はパパの言葉を拒絶^{きよせつ}するかのよう「首を振った」が、Yではパパは「わたし」の話を一度受けとめた上で「首を振っ」ている。

エ、Xは「わたし」がパパの気持ちをさかなできるように「首を振った」のに対し、Yではパパは「わたし」の機嫌をそこねないよう気をつけながら「首を振っ」ている。

問 五、——線③「ママは俺たちを残して、遠くに行っちゃった」とありますが、「ママ」の現在の様子を説明している一文を文章中から四十五字以内で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問 六、——線④「二十何年ぶりだかの親子の対面は、全然ドラマチックじゃなかった」とありますが、これはどのようなことですか。その説明として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、パパとお祖母ちゃんの感動的な再会を「わたし」は期待していたが、実際はそれに反していたということ。
イ、パパと久しぶりに再会したお祖母ちゃんの第一声があまりにも普通で、「わたし」がとまどったということ。
ウ、長く離ればなれだった親子にしてはあっさりとした再会だったため、「わたし」が拍子抜けしたということ。
エ、お祖母ちゃんの態度が二十数年ぶりの親子の再会とは思えず、「わたし」がいらだったということ。

問 七、——線⑤「断言したことは必ず実現してきた」とありますが、この部分を言いかえた次の文の空欄に入る漢字一字を、それぞれ考えて四字熟語を完成させなさい。

ママは何事にも

1、一字

 言実

2、一字

 する人だ。

問 八、——線⑥「パパは、今まで見たこともないような顔をしていて」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉をそれぞれ指定された字数で答えなさい。ただし、1は考えて答え、2は文章中の言葉を使って答えること。

1、十字以内

 を応援したいと思いつつも、

2、二十字以内

 という昔の自分と今の「わたし」の状況が重なり、心の底から応援しきれないという複雑な気持ちでいるから。

問九、この文章の内容や表現の説明として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、パパの名前も「わたし」の名前もそれぞれの母親が名付けたもので、二つを並べると、とある星の並びの名称になる。

イ、文章中には「……」が多用されており、どの部分からも登場人物たちの言葉では表現できない繊細な感情を読みとることができる。

ウ、お祖母ちゃんに対するお祖父ちゃんという言葉について、「わたし」はお祖母ちゃんに同情しながらもすべてを否定できずにいる。

エ、「パパは少しだけきちんとした服装になり」は、久々の対面のために身なりを整えつつも、会うのは全くの他人ではなく実の母親であるという意識が「少しだけ」という言葉に表れている。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

さて、① 読書に話を戻そう。日頃、本を読むことで、いろいろなものが頭の中にインプットされる。多くは「知識」というデータである。これを頭の倉庫に沢山ストックしている人が、いわゆる「知識人」とか「博学」などと呼ばれているようだ。

なんでも知っている人を、「歩く辞書」などと形容するように、覚えた知識をすぐに披露できれば、周囲から尊敬される。少なくとも、これまではそうだった。そういう人が「先生」と呼ばれ、教えを乞う人々が集まったのである。

しかし、その辞書は、つまり本である。辞書は歩かない。生きていない。だから、辞書を使う人が、言葉から調べなければならない。発音の順番で並んでいるので、少なくとも読み方を知っていれば、その意味を調べることができる。国語辞典や百科事典や英和辞典などがこれである（英語では、読み方ではなく、スペルを知っている必要がある）。

昔は、辞書というものが今ほど A ではなかっただろう。② 編集することも難しいし、印刷して安く配布する技術もなかった。だから、「歩く辞書」的な人が重宝された。ア

そもそも、② 頭の中に知識をインプットするのは何故だろう？ どうして頭の中に入れなければならないのか。それは、咄嗟のときに辞書など引いていられなかったり、人にきくことができない環境であれば、頭にストックしている価値がある。イ

であれば、苦勞して覚えなくても、ただ辞書を買って持っていれば良いではないか、という話になる。ウ ネットに依存している現代人の多くが、これに近い方針で生きているようにも見えてしまう。エ

しかし、そうではない。知識を頭の中に入れる意味は、その知識を出し入れするというだけではないのだ。頭の中で考えるときに、この知識が用いられる。じっくりと時間をかけて考えるならば、使えるデータがないかと外部のものを参照できるし、人にきいたり議論をすることもできるが、一人で頭を使う場合には、そういった外部に頼れない。では、どんなときに一人で頭を使うだろうか？

それは、「思いつく」ときである。

ものごとを発想するときは、自分の頭の中からなが湧いてくる。これは、少なくともインプットではない。ただ、言葉としてすぐに外に出せるわけでもなく、アウトプットの手前のようなものだ。面白いアイデアが思い浮かんだり、問題を解決する糸口の③ようなものを思いついたりする。このとき、まったくゼロの状態から信号が発生する、とは考えられない。そうではなく、現在か過去にインプットしたものが、頭の中にあって、そこから、どれかとどれかが結びついて、ふと新しいものが生まれるのである。

一般に、アイデアが豊かな人というのは、なにごとにも興味を示す、好奇心旺盛な人であることが多い。これは、日頃からインプットに積極的

だということだ。ただ、だからといって、本を沢山読んでいけば新しい発想が湧いてくるのか、というところもそれほど簡単ではない。 [B]、それくらいことは、ある程度長く人生を歩んできた人なら「存じだろう」。

いずれにしても、いつでも検索できるのだからと頭の中に入れておける人は、このような発想をしない。 [C]、自分の知識、あるいはその知識から自身が構築した理屈、といったものがあって、初めて生まれてくるものだ。そういう意味では、頭の中に入れてやることは意味がある。テストに出るからとか、知識を人に語れるからとか、そういった理由以上に、頭の中に入った知識は、重要な人間の能力の一つとなるのである。

また、発想というのは、連想から生まれることが多い。これは、直接的な関連ではなく、なんとなく似ているものなどから引き出される。現在受けた刺激に対して、「なにか似たようなものがあつたな」といった具合にリンクが引き出される。人間の頭脳には、これがかなり頻繁にあるのではないかと僕は感じている。

「これと同じことがどこかであつたな」と思いつく、いわゆるデジャヴも同じである。思いついたときには、言葉になっていない。なっていないから、「なんとなく……」と思いつく。思いついたとわかるのに、何を思いついたのか、なかなか引き出せない。それは、視覚的な情景だったり、もっと別の感覚（たとえば嗅覚）であつたりする。ただ似ているというだけで、「そうそう、あのときと同じ」で終わってしまうこともある。むしろその方が多い。 [D]、考えても考えても、どうしても思いつかないこと、つまり、思いつきを逃してしまうこともある。夢を思い出せないみたいに、たしかに一度は自分の頭に浮かび上がったのに、煙のように消えてしまうのだ。

しかし、ときには「もしかしたら、あれが使えるのではないか」となったり、「これは、あれとなにか関係があるのでは」となったりして、そこから考えていった結果、新しいアイデアに辿り着けることがある。思いついただけでは、ただのアイデアであり、使いものになるかどうかは、実際に試してみたり、もう少し調べてみたり、あるいは正しいかどうか計算してみたりしないとわからない。それらの確認が、自分ではできないこともある。使えるかどうか、やはり知識がないと判断できない。でも、④この段階では、他者に協力を求めることも、コンピュータを利用することもできる。

さて、このような連想のきつかけになる刺激とは、どんなものだろうか。それはさまざまで、そもそも刺激だと感じない些細なものかもしれない。実際、そういったものに敏感か鈍感かで、連想が起動するか、そのまま見逃すかが決まっているようにも考えられる。

日頃、人間はそんなに多くを経験するわけではない。自分の生活や仕事の範囲であれば、毎日とはさほど変化はない。ときどき、旅行をすると刺激的なインプットがあるように感じるの、それらが日常のものとは違っていているから、いわば自分から遠く離れた情報だからである。距離的に遠く離れるという意味ではない。知識的、興味的に遠いということである。

現代は、旅行にいなくても、TVやネットを通して、世界中の情報にアクセスできるので、日常から離れた刺激は、選り取りみどりである。ところが、たとえば、TVであれば、毎日、毎週、同じ番組を見て、ぼんやりと時間を過ごすようになって、結局はそれが日常になってしまう。

日常になれば、刺激は薄くなる。薄くなったと、おそらく自覚できるだろう。「ああ、なんか面白いことがないかな」と欠伸あくびをしたくなる気持ちこそが、誰にでも備わっている人間の好奇心の発動といえるだろう。

連想のきっかけとなる刺激は、日常から離れたインプットの量と質に依存している。そして、その種のインプットとして最も効率が良いのが、おそらく読書だ、と僕は考えているのだ。

読書以外にももちろんある。僕の場合は、自然の観察や、手を使った工作なども、ほとんど同じくらい刺激がある。これは個人差があるだろう。電車に乗って、車窓の流れる風景を眺めているときも、いろいろ思いつくが、目で見ている数々のもの、街や村、看板、人々、構造物、地形なども刺激になるようだ。

しかし、誰にでも共通して効果があるのは、やはり読書だと思う。それは、そこにあるものが、人間の個人から出てきた言葉であり、その集合は、人間の英知の結晶だからである。本には、日常から距離を取る機能がある。本を開き、活字を読み始めるだけで、一瞬にして遠くまで行く感覚がある。^⑤時間を遡さかのぼることも容易だし、^⑥自分以外の人物の視点でものを見ることができ、^⑦経験したことのない感情も知ることができるし、^⑧人の思考の流れを辿ることだってできる。

(森博嗣「読書の価値」より)

(注1) 「ストック」 ……蓄たくわえること。

(注2) 「編纂」 ……いろいろな原稿げんこうや材料を集めて整理し、作り上げること。編集。

(注3) 「デジャヴ」 ……一度も経験したことがないのに、すでにどこかで経験したことがあるように感じること。

問 一、——線①「読書」とありますが、筆者は読書の価値はどのようなことだと述べていますか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

1、七字 になる 2、十一字 を得られること。

問二、A にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、基本的 イ、一般的 ウ、優先的 エ、有効的

問三、文章中には次の一文が抜けています。この文を入れるべき最も適当な箇所を文章中のア～エから選び、記号で答えなさい。解答にはをつけずア～エの記号のみで答えること。

今は、みんながスマホを持っていて、なんでも手軽に検索できるのだから、この価値は下がっているだろう。

問四、——線②「頭の中に知識をインプットするのは何故だろう」とありますが、その答えにあたる部分を「くため。」に続くように文章中から九字で探し、抜き出して答えなさい。

問五、——線③「糸口」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、過去にうまくいった方法のこと。
イ、またとない時期のこと。
ウ、筋道や方向性のこと。
エ、きっかけや手掛かりのこと。

問六、B ～ D にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、あるいは イ、だから ウ、やはり エ、おそらく

問七、——線④「この段階」の内容を文章中の言葉を使って、三十五字以内で答えなさい。

問 八、——線⑤「時間を遡ること」・⑥「自分以外の人物の視点でものを見ること」・⑦「経験したことのない感情も知ること」・⑧「人の思考の流れを辿ること」とありますが、これらに共通している特徴はどのようなことですか。「〜であること。」に続くように文章中から九字で探し、抜き出して答えなさい。

問題は次ページに続きます。

④ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、文章中の①～⑥は形式段落の番号を示しています。

① 情趣は文学の世界で生きている。① そんな絶景がある。秋田の象潟きょうかたは知られているだろう。鳥海山を背景に、大小さまざまな島が浅い海に浮かんだ景色は、松島と並んで称賛され、古くから歌枕うたまくらになった。

② 〈象潟の桜は波に埋うずもれて花の上漕こぐ海人の釣舟〉。② 西行が詠んだと伝わる歌は往時をしのばせていよう。芭蕉も『奥の細道』で美しさをたたえた。その後の一八〇四年に起きた直下型地震で土地が隆起し、潟かたは埋うまってしまう。現在の景観にも趣おもむきはあるが、かつての情趣にひたるには、歌や俳句を頼りにする必要がある。

③ アフリカの有名な絶景の地にも異変が起きている。地球温暖化が今のまま推移すると、最高峰のキリマンジャロ山など三つの山の氷河が二〇四〇年代になくなり、大陸から氷河が消える。驚きの見通しを世界気象機関（WMO）が先日、公表した。

④ 〈全世界のように幅広く、大きく、高く、日をうけて信じられないくらい白く、キリマンジャロの四角い頂があった〉。④ ヘミングウェイの小説『キリマンジャロの雪』の一節だ。映画も印象深かった。

⑤ 雄大なあの景色にも、いずれ影響は及ぶのだろうか。趣が文学や映画の世界に生きる時がくるかと思えば、切ない。

⑥ 気候変動とは、かけがえない景色を③ 一方通行で文学の世界に、やってしまうものかもしれない。失われる絶景は他にもありそうだ。

④ ケイシヨウだろう。

（東京新聞「筆洗」より）

〔注1〕「歌枕」……………和歌に詠まれて有名になった日本各地の名所・旧跡のこと。

〔注2〕「西行」……………西行法師（一一一八年～一一九〇年）。平安後期の歌人・僧。「象潟の…」の和歌は「象潟の桜は波の間に散つて、漁師の釣舟がその花の上を漕いで行くように見える」という意。

〔注3〕「芭蕉」……………松尾芭蕉（一六四四年～一六九四年）。江戸時代前期の俳諧師。東北各地に点在する歌枕や古跡を辿る旅を紀行文『奥の細道』として記した。

〔注4〕「ヘミングウェイ」……………アーネスト・ミラー・ヘミングウェイ（一八九九年～一九六一年）。アメリカの小説家。

問一、——線①「そんな絶景」とは、どのような景色のことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、想像を絶するほどの美しさによって古くから歌枕になっており、人々の間ですで大変有名になっていた景色。
- イ、かつての美しい景観が失われてしまい、文学の記述から元の姿を推し量ることしかできなくなってしまった景色。
- ウ、実際の景観を見るよりも、文学の世界の描写から想像をふくらませた方が何倍も魅力的に感じられるような景色。
- エ、文学作品の中ですでに予言されていた通り、急激な気候変動によって本来の美しさが失われてしまった景色。

問二、——線②「西行が詠んだと伝わる歌は往時をしのばせていよう」とありますが、これは具体的にどのようなことを述べていますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、今では潟が埋まってしまった象潟だが、かつては浅い海が広がる景観だったことが西行の和歌から推察されるということ。
- イ、地震で桜も波に埋もれてしまった象潟だが、復興のために海人が活躍したことを西行が和歌によって伝えているということ。
- ウ、震災で荒れ果ててしまった象潟だが、以前は桜の名所であったことを西行が和歌の中で懐かしく思い返しているということ。
- エ、松島と並ぶ名所であった象潟だが、すっかり様子が変わってしまったことを西行が和歌の中で残念がっているということ。

問三、——線③「一方通行」とありますが、この言葉はここではどのような意味で使われていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、変化の度合いが激しいこと。
- イ、意思の伝達が一方的なこと。
- ウ、二度と元には戻れないこと。
- エ、制約が厳しく不自由なこと。

問 四、——線④「ケイショウ」を漢字に直したものととして最も適當なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、軽症 イ、形象 ウ、景勝 エ、警鐘 オ、継承

問 五、この文章を意味段落に分けたものとして最も適當なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、

1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6
- イ、

1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6
- ウ、

1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6
- エ、

1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6

